みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Museum and Social Movement : Redefining the Minamata Disease Incident through Exhibit and Narratives

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-07-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平井, 京之介 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003861

国立民族学博物館研究報告36(4): 531-559 (2012)

運動する博物館
──水俣病歴史考証館の対抗的実践──

平井　京之介*

Museum and Social Movement: Redefining the Minamata Disease Incident through Exhibit and Narratives

Kyonosuke Hirai

熊本県水俣市の水俣病歴史考証館は，水俣病事件を永く記憶にとどめ，水俣病の経験を出発点として，社会のあり方を考えることを目的として，水俣病被害者とその支援者によって設立された民間の博物館である。これまでの博物館研究においては，カタストロフィを展示する博物館について，歴史的な不正を指摘し，被害者が自らの経験を語る権利を取り戻すという権力化の側面が強調して論じられてきたが，一方で社会運動の媒体としての博物館の可能性については十分に検討されてこなかった。本稿は，水俣病歴史考証館が展示と語りを通じて水俣病事件を知らない人びとに何をどのように伝えようとしているかを検討し，この博物館が，被害者の立場から水俣病事件についてのオルタナティブな見方を提示するという意味と，展示施設という枠組みを越えて社会運動の媒体として機能するという 2 つの意味で，対抗的な博物館であることを論じる。

Located in Minamata, a city in southwest Kyushu, the Minamata Disease Museum was opened as a memorial to the Minamata disease incident and to question the way we live and the basis of our livelihoods. It is a private museum run by the victims and their supporters. Museum studies have presented a view of museums memorializing a catastrophe as vehicles for empowerment, where the victims can point out historical injustice and restore the right to narrate their own experience in public, while failing to fully document their possibilities as social movement. In this paper I argue that, by focusing on what the museum defines through its exhibit and guiding narra-

*国立民族学博物館民族文化研究部

Key Words：Minamata disease, social movement, memorial museum, ethnographic authority, narrative

キーワード：水俣病，社会運動，メモリアル博物館，民族誌的権威，語り

tives on the incident and how it communicate with those who have no experience of it, the Minamata Disease Museum can be considered as a countermuseum both in the sense that it presents alternative visions of the incident from the victims' point of view and in the sense that it functions as an agent of social change, which differs from the framework of a facility for exhibition.

1　はじめに
2　考証館の設立
3　市立資料館の歴史叙述
4　考証館の展示
4.1　展示内容
4.2　展示のアプローチ
4.3　展示が伝えるもの
5　考証館の語り
6　おわりに

1　はじめに

水俣病はチッソ水俣工場が不知火海に流した工場廃水によって引き起こされた公害病であり，「公害の原点」といわれる。健康被害と環境破壊の大きさで世界に類例のない惨事であり，自然と人間との関係に対する我々の理解を根底から変えることになった。最初の患者が公式に確認されてから半世紀以上が経過した現在，二度と悲惨な公害を繰り返さないために，その歴史と教訓を次の世代に伝えていくことが大きな課題になっている。水俣には，水俣病の歴史を展示する施設として，水俣市立水俣病資料館（以下，市立資料館）と，財団法人水俣病センター相思社（以下，相思社）が運営する水俣病歴史考証館（以下，考証館）の 2 つがある[1)]。両館の掲げるミッションはほぼ同じだが，展示内容には大きな違いがみられる。一言でいえば，市立資料館が「公的」な言説を再生産しているのに対し，考証館は被害者の立場から対抗的な言説を生み出している。

米国の博物館研究者，P・ウィリアムスは，米国ホロコースト記念博物館や広島平和記念資料館，カンボジアのトゥール・スレン虐殺博物館など，多くの市民が犠牲になった悲惨な歴史的事件を記録し未来に伝えることを目的とする博物館を，メモリアル博物館（memorial museum）と呼んだ（Williams 2007: 8）。考証館をそのひとつに数



写真 1　水俣市立水俣病資料館

えることは可能だろう。水俣病の多発地帯という記憶の場所に立っている。水俣病被害者とその支援者によって計画され，建設された。被害者の生活支援や水俣病に関する調査研究と一体になって運営されている。被害者と協力して水俣病の経験を伝えるという強い教育的使命を持ち，その問題意識は現代社会の諸問題にも向けられている。これらはみなウィリアムスが挙げたメモリアル博物館の特徴と一致する（Williams 2007: 21）。

本稿の目的は，考証館および相思社が[2]，博物館という文化的制度を自らの目的遂行に使用する独自のやり方を評価することにある。考証館が展示と語りを通じて何を叙述しているか，事件を知らない人びとに何を訴えかけているかに注目しながら，水俣病事件の歴史と政治の文脈のなかに考証館を位置づけ，その意味と意義を考えてみたい。最初に，相思社が考証館の設立に至った経緯を概観する。このことは，考証館の実践が相思社の社会運動の伝統と連続したものであり，その歴史と文化を色濃く反映したものであることを理解するのに役立つだろう。次に，市立資料館の展示を紹介し，考証館が対抗しようとする公的な歴史叙述の内容を確認する。その後で，考証館の展示と語りが何をどう伝えようとしているのかを検討する。最後に，考証館の実践がいかなる意味で対抗的なものといえるかについて考えてみたい。

この研究の背景には，博物館実践の社会運動的側面，あるいは社会運動の媒体としての博物館の可能性が，これまでの博物館研究において十分に検討されてこなかったのではないかというわたしの問題意識がある。カタストロフィを展示する博物館については，歴史的な不正を指摘し，被害者が自らの経験を語る権利を取り戻すという権力化の側面が強調されてきた。じっさい，考証館も，被害者の記憶や行政の失策，地



写真 2　水俣病歴史考証館

域社会の抑圧的構造などをはっきりと記すことで，公的な歴史叙述や，それを正当化する科学的・司法的な言説を批判している。しかし表象の次元を越えて，博物館実践を展示空間における来館者と博物館スタッフとの相互行為としてとらえると（Sandell 2002; 2007），人びとの自己変革を促す媒体として博物館が機能する可能性がみえてくる。

わたしの水俣病事件とのかかわりは，2004 年の水俣への訪問がきっかけとなってはじまった[3)]。相思社で常務理事の遠藤邦夫さんから水俣病事件の状況と相思社の活動について話を聴いた[4)]。遠藤さんは，水俣病として新たに名乗り出る人が今でもいること，水俣病や水俣に対する差別や偏見が根強く残っていること，水俣病の教訓を伝える活動が水俣で活発になっていることなどを熱く語ってくれた。とうの昔に事件は解決済みと思い込んでいたわたしは，自らの無知を恥じるとともに，水俣で 30 年以上に渡って続く相思社の運動に強い関心を持った。2005 年秋から約半年間，ボランティアとして在籍しながら相思社について民族誌的な調査をおこなった。その後も現在まで，年に数度の補足調査を続けている[5)]。本稿では，展示内容や展示のアプローチについてのわたしの考察や解釈とともに，これまでの調査で得られた民族誌的データを用いる。相思社スタッフのインタビュー，相思社内部の議論，相思社スタッフと来館者とのやりとりなどが主要な情報源になる[6)]。これらのデータを用いることで，考証館の対抗的な実践をより具体的に描き出すことができるだろう。

2　考証館の設立

まずは考証館の設立母体である相思社の紹介からはじめよう。相思社は，水俣病被

害者の生活支援とともに，水俣病に関する情報の収集および提供を目的として，1974年に設立されたNGOである。当初構想されたミッションは，以下の4つであった。①患者とその家族が集まる拠り所になる[7]。②被害者の立場に立った医療サービスをおこなう。③水俣病事件関連の資料を収集し，提供する。④患者が働くための共同作業場となる。これらのミッションの実際の活動に占める割合は，時代とともに大きく変化していった。1970年代後半は，組織の経済的自立が急務とされ，低農薬ミカンやリンゴの販売，有機栽培のための堆肥製造販売，廃食油をリサイクルした石けんの製造販売，キノコの製造販売，生鮮食料品販売などの事業に力が注がれた。これらはたんなる収益活動ではなく，水俣病の教訓を伝える活動のひとつとして位置づけられていた。たとえば，低農薬ミカンの販売は，漁師として働けなくなった被害者のミカン栽培を支援するためにはじめられたものであり，安全な食生活，環境への配慮，地域づくりをテーマにした商品を会員向けに販売する協同組合運動であった。1980年代になって，補償を求める被害者の運動が激化すると，相思社は各種事業を継続しつつも，被害者団体の事務局を引き受け，訴訟や座り込みなどの運動を全力で支援するようになった。1990年代に被害者とチッソや行政とのあいだで和解のプロセスが始動すると，相思社はいわゆる「新しい社会運動」へと活動内容を変化させていく[8]。統治機構に社会的正義や民主的振る舞いを求めるよりも，水俣病の教訓を伝えることによって，独自の価値観やライフスタイルに基づくオルタナティブなコミュニティを自分たちで実現しようとする傾向が強くなった。

博物館をつくる構想が相思社で最初に生まれたのは，1981年である。当時，被害者の経験を言語で表現することの難しさを痛感していた相思社世話人の柳田耕一が，ある水俣病被害者から25年使用している漁具をみせられたとき，実物のもつ存在感を実感し，事実と実物が有する訴求力を表現する展示館を構想したという。機関紙『水俣』紙上で柳田は次のように書いている。「このカキ打ちの喚起力というか存在する力に比べれば，自分たちの表現力はとるに足らぬものであることを実感として受けとめました」（柳田 1981）。柳田の提案に賛同した当時理事長だった川本輝夫は，「水俣病事件を歴史的にとらえ，私たちの生きている時代を水俣病事件を通して検証しよう」と，まだみぬ展示館を「水俣病歴史考証館」と名づけた（吉永 1989）。1983年秋，「水俣病歴史考証館準備委員会」が発足し，機関紙「水俣病歴史考証館通信」の発行が開始された。だが，『水俣病30年　写真展・資料展』の開催をきっかけに実際の準備活動がはじまったのは，1986年になってからのことである。このときの展示がそのまま考証館の展示の原型になった。数億円規模の博物館を新たに建てるという当初

の計画は見直され，空き家になっていた相思社敷地内のキノコ栽培工場を改装して博物館をつくることになった。

考証館の建設は文字通り「手作り」だった。延べ床面積約 230 平方メートルの鉄骨スレート葺き平屋木造家屋が，全国からの寄付や無利子の借用金 500 万円と，専門家や支援者の無料奉仕によって博物館に改装された。展示内容は，被害者から聞き取りを重ね，研究者や専門家の協力を仰ぎながら，相思社スタッフが自分たちで考えてつくったという（水俣病センター相思社 2004: 213–216）。その際，以下の相思社の 4 つの活動が基礎になったと考えられる。

ひとつは水俣病研究会との連携である。1969 年，水俣病裁判闘争を支える法理論の構築およびデータの収集を目的として熊本で設立された水俣病研究会（当初は裁判研究会）には，研究者，ジャーナリスト，労働者などが参加していた。その主要メンバーが相思社の設立や運営にもかかわっており，水俣病研究会が集めた資料の一部が考証館の展示の基礎になった（吉永 1989）。考証館設立の責任者だった吉永利夫さんは，わたしとのインタビューで，相思社から派遣されて 3 年間この研究会で資料整理を手伝った際に，水俣病事件に対する分析のアプローチを学んだこと，その過程で知った事実を伝えなければならないという認識を深めたことが，考証館の準備段階で活かされたと語っている。

もうひとつは不知火海総合学術調査団との交流である。この調査団は，作家の石牟礼道子の要請により，不知火海沿岸地域での水俣病被害の実態解明を目的として，1976 年に 12 人の社会科学者で結成され，5 年間続けられた。団員には，相思社とかかわりが深かった最首悟，原田正純，石牟礼道子，日高六郎などがいた。調査の経緯と結果については 1983 年に上下巻として出版された『水俣の啓示――不知火海総合調査報告』（色川 1983）に詳しい。「調査団日誌」の章に描かれているように，このとき相思社は現地での案内役を務めた。その研究成果は，展示パネルのなかに幅広く採り入れられた。また，展示の構成や内容について，調査団員であった色川大吉や最首悟，記録映画作家の土本典昭[9] に度々相談してもいた。調査団の影響がもっともはっきりみられるのは，被害者への差別と抑圧の歴史的構造を説明した展示部分であろう。

第三に，生活学校と名づけられた相思社の活動である。生活学校は，一年間のフリースクールとして，1982 年から 1992 年にかけて相思社によって開校された[10]。全国から集まった希望者が合宿し，患者との共同生活，水俣病学習，農作業などを通じて社会のあり方や自身の生き方を問い直すという学校だった。『考証館通信』準備号

のなかで吉永さんは書いている。「生活学校の活動は，そのまま『考証館』の準備につながるものとして位置づけられるでしょう。学習会での患者さんたちの話が，記録として生きるはずだし，さまざまな道具や資料の収集もこのなかで進められます。さらに，水俣病から読み取られたことの実践が，前向きな『考証館』のイメージの活性化を呼ぶでしょう」（吉永 1983: 3）。生活学校で学んだことは，とりわけ漁民の暮らしを紹介する展示に活かされた。

第四に，石牟礼道子とその著作の存在は，考証館設立の過程を考えるうえで無視できないものである。精神的ないし情念的なレベルで大きな影響を与えた。展示制作でもっとも影響を受けたものは何かというわたしの問いに，吉永さんは次のように答えている。「展示については石牟礼道子の影響が強かったと思う。患者の人たちが暮らしている，生活している，漁をやっている，笑っている，考証館では（そうしたものへの）水俣病の影響を展示したい。被害や闘いばかりではなく，道子さんの描いている水俣病。ばあさん，じいさん，人びとのかかわり，人の暮らし方，天のくれらすもんでござる，それが壊されたことを」。水俣を訪れる人の多くが，きっかけは被害者を描いた小説を読んだり映像をみたりしたことだという。なかでも特別な存在が，「水俣のバイブル」といわれる『苦界浄土　わが水俣病』である。石牟礼はこの著作を通じて，患者の存在としての衝撃力や，患者がたたえている異様な優しさと不思議な魅力を描くことに成功した。渡辺京二が『苦界浄土』の解説で指摘するように，石牟礼は，「あの人（患者）が心のなかでいっていることを文字にする」（渡辺 2011: 97）ことができたのである。「巫女」のようなこの役割は，沈黙する被害者に限りなく近づき，彼らの世界や感覚を知ったうえではじめて果たしうるものだろう（渡辺 2011: 103）。相思社が考証館で目指したのは，被害者の精神世界からみた水俣病の意味を描くことであり，彼らの情念そのものに立ち会っていると感じられるような展示を実現することであった。これを相思社では，石牟礼のことばを借りて，「考証館に魂を入れる」と表現した。

1988 年，「水俣病事件を永く記憶にとどめ，水俣病の経験を出発点として，社会のあり方を考えること」を目的として，考証館が開館する。相思社の運動の歴史と文化のなかから生まれた博物館であり，相思社のスタッフが自らの思いを伝えるためにつくった博物館である。制作過程では，プロフェッショナルにみえる博物館展示を実践することよりも，自分たちが伝えたいことを伝えたいように伝えることが優先された。それでは，相思社は博物館という媒体を用いて何をどう伝えようとするのか。この問いに取り組む前に，考証館が対抗する公的な歴史叙述の内容を押さえておこう。

3　市立資料館の歴史叙述

市立資料館は，「水俣病の経緯を整理し，水俣病の歴史と現状を正しく認識し，悲惨な公害を二度と繰り返してはならないという切なる願いと，貴重な資料が散逸しないよう収集保存し，これを後世への警鐘としていくこと」を目的として，1993 年に開館した。建物は鉄筋コンクリートの二階建てで，一階に資料閲覧室と事務室，応接室などがあり，二階に展示室とラウンジ，語り部室がある。ここでは市立資料館の展示内容とそれが伝えるメッセージを検討する。だがその前に，なぜこのタイミングで市立資料館が建てられたのかを考えておく必要があるだろう。

市立資料館の設置は，水俣市の水俣病事件に対する姿勢に大きな変化が生じたことを意味する。水俣市は 1980 年代まで水俣病の問題解決に積極的な役割を果たしてこなかった。加害企業であるチッソの存続を支援する一方で，国や熊本県の影に隠れて事件と距離をとる態度をとってきた（cf. 石田 1983; 栗原 2005）。国および熊本県が 1977 年から約 485 億円をかけて進めた水俣湾のヘドロ処理事業が 1990 年に終了すると，環境庁（当時）は，完成した埋立地の活用策を検討するなかで，再生水俣のシンボルとして水俣病資料館の設置を決めた。同年，熊本県と水俣市は，水俣病の教訓を活かした環境再生・創造を核とする地域づくり（あいとやすらぎの環境モデル都市づくり）を推進する事業として「環境創造みなまた推進事業」を開始し（1998 年まで継続），資料館を通じた情報発信をそのひとつに位置づけた。国土庁（当時）の地域



写真 3　市立資料館の展示場内

個性形成事業として 2 億 3 千万円の補助を受け，総額 6 億 1 千万円をかけて資料館を建設した。これは水俣市が，それまで水俣病事件について沈黙を守ってきた方針を転換し，水俣病事件を地域振興策の柱として位置づけたことを意味する[11)]。

水俣市の方針転換の理由は何か。相思社の吉永さんは次の 4 つの理由が考えられるという。「①環境問題が世界的課題と叫ばれる時代となり，環境問題としての水俣病事件は，行政が取り上げ可能な一般的課題となった。②チッソの地域支配に変化が生じたり，世代が変わり，水俣病に直接的な嫌悪感をもつ市民が減ってきている。③水俣病被害者の運動が，行政にとって予想不可能なものではなくなった。④水俣（病）が世界から注目されている以上に，水俣をアッピールできるものがみつからない」（吉永 1991a: 3）。事件発生から資料館建設までのあいだに経過した歳月は，被害がもっとも甚大だった頃の記憶をある程度薄れさせるには十分な長さであった。被害者運動は行き詰まり，疲弊し，もはや過激な闘争には逆戻りしない段階に到達していた。またこの頃，政治家の仲介や裁判所による和解勧告などによって，熊本県と水俣市，チッソ，被害者団体とのあいだで和解のプロセスが始まっていた。これらのことから，大きな反対運動が起こることなく，しかも行政が許容できる範囲内で，水俣病事件を表象できる歴史的状況が生まれていたといえる。そこで水俣市は，博物館を利用した地域づくりに活用しようと考えたのであろう。

市立資料館では，来館者はまず映像展示室の大型スクリーンで「水俣病のあらまし」という映画を観てから展示室に入る。展示室には一応順路があり，おおまかに年代順になっている。展示は，「水俣病の歴史」「水俣病の科学」「世界の有機水銀」「水俣病への対策」「今後への取組」という 5 つのテーマで構成される。解説パネルが中心で，実物はほとんどない。新聞記事と歴史的文書が大量に使用されているのが特徴だ。各パネルにほぼ 1 台ずつモニターテレビが埋め込まれており，ボタンを押すと，3 分程度の記録フィルムが流れるようになっている。2000 年代後半から，企画展用に作成されたパネルを，企画展終了後に，展示室を囲む壁面に展示するようになった。たとえば現在は，水俣病被害者団体，石牟礼道子の創作活動，企業の社会的責任，水俣湾再生事業といったテーマのパネルが並ぶ。結果として，異なるテーマの，スタイルの違うパネルが向き合い，全体のストーリーが来館者にわかりにくくなっている[12)]。

考証館と比較して，大きな展示スペースが割かれているのは，「水俣病の科学」である。発症のしくみ，工場排水の経路，魚介類への水銀の蓄積，水銀摂取，水俣病の病像など，模式図や統計表，顕微鏡写真，実物サンプルを用いて水俣病発生のメカニ

ズムを詳細に解説している。また，「水俣病への対策」にも大きなスペースが割かれている。図表や写真，地図を用いて，補償救済制度の制定，水俣病被害者向け医療施設の整備，水俣湾のヘドロ処理など，行政が講じた対策について細かいデータを挙げて解説している。

一方で，裁判判決を伝える部分を除き，水俣病事件における行政の責任についてはほとんど言及されていない。被害者の苦しみの少なくない部分は，行政による水俣病被害者の扱いによって生じたものである。チッソへの暗黙の支援，被害者の人命軽視，官僚主義といった行政の態度は，間違いなく被害の拡大につながった。相思社スタッフが指摘するように，「たとえば水俣病事件に対する行政の責任は，少なくとも拡大防止と被害補償という点では確実にある。1959 年当時の中村水俣市長らがおこなった『チッソの排水停止は困る』という陳情の一例からも，水俣市とチッソの共犯関係は否定できない」（さとう 1993: 13）。ところが市立資料館の展示は，分析や評価はもとより，水俣病の歴史のなかで果たした水俣市の役割について触れることさえ避けている。過去の特定の要素を選択的に忘却することによって，水俣病事件の物語を創造しているのである（スターケン 2004: 26）。

また，市立資料館の展示では，被害者が水俣病事件をどう生きたかがまったく表象されていない[13]。専門家によって分析され客体化された匿名の身体としてのみ被害者は描かれている。被害者が生きていくなかで遭遇した苦痛や死や悲嘆は，統計的データや病理写真など，専門家の合理的思考やテクノロジーによって変形されたものとして（クラインマン他 2011: iii），展示に登場する。いわば被害者の声に代わり，専門家の声が提示されているのだ。

市立資料館の展示は科学的なアプローチを採用している。タイトルや解説文には事実の羅列が多く，意見や評価を含む表現は避けてある。受動態が多用され，修飾語句はほとんどない。語り手は全知の第三者であり，語り手としての水俣市の存在は表面に出ない。高度に専門的な説明や写真は多くの来館者に理解困難と思われるが，それでも展示の科学的権威を高める役割は十分に果たしている。それはまた，博物館の意図的選択を科学的調査の結果として表示することにもなる。被害者を客観的データとして扱うことは，水俣病を科学的に表象する効果的なやり方であるばかりでなく，被害者の声を反映させないためにも都合のよいものになっている。

一方で，市立資料館の展示は，出来事の歴史的文脈や出来事間の因果関係をほとんど説明していない。展示全体の 3 分の 1 を占める「水俣病の歴史」では，時系列的な順序で出来事を列挙しているが，見出しにその年代全体をまとめる簡単な記述がある

だけで，あとは個別の出来事を紹介する新聞記事や歴史的文書，写真，図表などが，前後の他の項目とは孤立して存在するように並べられている。しかも記事や文書の具体的な内容は，字が小さいためにほとんど読むことができない。当時の新聞記事の刺激的な見出しによって，水俣病の恐ろしさや原因究明の困難さは伝わるだろう。陳情書や契約書，判決文などの歴史的文書などから，被害者とチッソや行政とのあいだに紛争があったことをうかがい知ることもできる。しかしそれらの記事や文書に関連する出来事のあいだの関係やその背後の文脈についての説明はなく，前もって学習して来なかった来館者がそのつながりを再構成することはできないだろう。ある相思社スタッフは次のように批判する。「ウソは書いてはいない。でも誰が，なぜ，この制度を作り，その結果どうなったかというのは書いてはいない」（弘津 1993: 17）。科学的，客観的証拠を並べる一方で歴史的因果関係を説明しない展示は，行政の不作為によって引き起こされた結果やその影響を矮小化することを助けている。行政の責任逃れによって対応が遅れ，被害が拡大したという水俣病事件の重要な教訓のひとつが隠されるのだ。

こうした展示は水俣病事件についてどんなことを伝えるだろうか。第一に，水俣病事件は終わった，あるいは少なくとも危機は乗り越えたということである。資料館の開館当時，相思社は機関誌で特集を組んでいるが，そのなかに次のような論評がある。「この資料館は名称の通り，本当に『資料館』であった。つまり，『過去に悲惨なことがあり，残念なことでした』。でも『今はちゃんと対策をとってます』という論調である。……いかにも第三者のつくったような，たとえば水銀中毒の発症のメカニズムやらが何かと詳しくモニターで解説されており，このことがことさら『過去のもの』であるかのように巧妙に思わせている」（堀 1993: 11）。すでにみた設立の経緯から明らかなように，市立資料館が建てられた目的のひとつは，水俣病事件を取り巻く論争に終止符を打つことだった。水俣病の原因は科学的に究明され，新たな発症は抑えられた。水俣湾に堆積した水銀ヘドロの処理は完了し，海水の水銀値は通常のレベルにまで下がった。被害者に対しては補償救済策を十分に整備し，和解が進んでいる。こうした物語を語る市立資料館の展示は，「公害脱却キャンペーン」（金子 2011: 24）のひとつといえるだろう。

第二に，水俣病事件が環境再生の物語でもあるということだ。市立資料館の建設計画が具体化したとき，吉永さんは皮肉たっぷりの論評を機関誌に書いている。「（市立資料館の開館は）水俣の地域振興策であり，数十年前なら考えられなかったけれども，水俣地域で一番利用できる最大の個性は『水俣病問題』との認識から出発している。

……要するに，水俣病を経験した地域だからこそ，より一層，環境や自然，生態系に配慮した地域づくりを推進していくといいたいのだろう」（吉永 1991b: 1）。市立資料館の展示は，行政がとった対策のほとんどが遅れてしかたなく講じたものであることや，被害者や支援者によってその不備を指摘されていることなどには触れずに，回復した，整備した，再生したという成功部分だけを勝利のシンボルとして強調する。それはあたかも困難な課題を克服した行政の英雄的態度を顕彰しようとする意図に発するものであるかのようだ。さらにそうした克服した課題を「環境」という流行のキーワードと結びつけることで，水俣病事件を取り巻くイメージや意識，主張をずらそうとしている。水俣病の経験を活かして「環境都市水俣」というアイデンティティを構築しようというのである。何かを想起することよりも，顕彰することを体現するという意味で，市立資料館には「モニュメント博物館」と呼べる側面がある。

第三に，水俣病事件に関する公的言説は正当なものであるという主張だ。あらゆる博物館は，社会についての特定の見方を構築し伝えることによって特定のイデオロギーを支持している（Sandell 2007: 3）。V・ダスは，インドのボパール事件の分析において，苦痛の生産と苦しみについての神正論が社会秩序の脅威となるのではなく，その正当化の手段となる社会的メカニズムを明らかにした（Das 1995）[14]。市立資料館は，科学や医療，司法の論理によって被害者の経験や感情を矮小化した水俣病事件像を描いている。この論理は，これまでに行政が水俣病事件において実施した政策の基礎にあったものと同じである。すなわち，市立資料館の展示は，自己の正当性を訴え，反対意見を抑圧した結果というだけでなく，行政がもつ社会についての特定の見方を反映したものといえるだろう。そして，この論理に適合する物語だけが水俣病事件の歴史として語られるべきだという主張がそこにある。行政は水俣病事件の教訓を伝える博物館を，自らに有利な社会秩序を正当化する官僚主義的な言説の強化に利用しているといえる。

こうしてみてくると，市立資料館は水俣病被害を拡大させた原因のひとつである社会の抑圧構造を再生産しているといえないだろうか。水俣病の被害拡大の背景には，行政が水俣の絶対的な支配者であった加害企業チッソ寄りの態度をとり続け，天草地方からの移民である貧しい漁民の被害を無視し抑圧してきたことがあった。市立資料館の展示は，科学的アプローチを用いて行政の対応策を正当化する一方で，被害者の要求や主張を無視し，彼らの経験を自らのマスター・ナラティブに適合するように矮小化して展示している。このマスター・ナラティブのなかでは，何が失われたか，どうやって失われたかをしっかりと理解することよりも，問題がどう乗り越えられたか

が前面に迫りだしてきている。行政の責任については裁判で判決が下された国と県の部分的な加害責任をかたちのうえでなぞるだけである。ここにおいて被害者は，改めて無視され，誤って表象され，抑圧されている。水俣市は自らの差別的な対応が被害者の苦しみの拡大につながった過程を展示に含めないことによって，水俣にいまだ存在する差別や偏見，抑圧の構造を認め，それらを根絶する機会を逸しているのである。水俣病事件を繰り返さないためには，行政を含む加害者による特定の諸実践の結果として被害拡大が生じていった歴史を見つめ直すことが欠かせないだろう。

4　考証館の展示

4.1　展示内容

考証館の展示の順路は一方向で，年代順になっている。テーマごとの区分は不明確な部分もあるが，「豊かな海と暮らし」「企業の犯罪」「原因究明期」「多様な被害」「対立から創造へ」の 5 つに分けられる。最後に小さなミュージアムショップがあり，水俣病関連の書籍やビデオ，オリジナルグッズなどが売られている。解説パネルと写真が中心で，歴史的文書や新聞記事，チラシなどの展示物が多いのは市立資料館と同じである。解説パネルの数とその情報量はさらに多くなっている。その一方で，比較的多くの実物が展示されてもいる。不知火海で使われていた小型の漁船，水俣病の原因を突き止める実験に使われたネコの小屋，高濃度の水銀を含むヘドロ，水俣病患者支援運動のシンボルとなった「怨」の旗，水俣病患者とチッソとのあいだで結ばれた患者補償協定書の原本，埋立工事で使われた看板，石牟礼道子著『苦界浄土』の生原稿などだ。

「豊かな海の暮らし」という最初のコーナーでは，水俣病の被害を受ける以前の不知火海の漁民の暮らしを紹介している。展示場に入ってすぐの広いスペースには，一そうの漁船が，以前に水俣で使われていた漁具とともに展示されている。これらはみな被害者から寄付されたものだ。周囲の壁面では写真や絵，ミニチュアなどを使って，海の自然と一体となって暮らしていた漁師たちの姿が生き生きと描かれる。「不知火海は，海辺の人びとをふところ深く包み込み，質素ななかにも，豊かな自然の恵みのあるあたたかい暮らしを与え続けてきた」とパネルに説明がある。とりわけ印象的なのが「魚が主食」と題された写真だ。漁師の家の庭先で 1961 年に撮られたこの写真には，汚染魚をそうとは知らずに分ける 3 人の女性と，それをみつめる 4 人の子



写真 4　考証館の漁船と漁具の展示

どもが写っている。女性の優しい表情と子どもたちのうれしそうな顔が強く胸を刺し，彼らの純粋さと無罪性を雄弁に語る。最初に水俣病に冒されることになったのは水俣湾周辺で生活する貧しい漁民であった。彼らは天草地方から水俣の海岸沿いに移り住んだ移民の子孫であり，水俣社会の主流とのかかわりが薄く，そもそもよそ者として差別的に扱われていた。そうした歴史的背景が水俣病被害者の差別や偏見を助長する社会的背景となったことを解説パネルは指摘する。

考証館が漁民の暮らしに焦点を当てる理由は 2 つあるだろう。ひとつは，水俣病被害者が失ったものは何かを強調することだ。彼らは健康を奪われたというだけでなく，仕事を，そして漁業という生活様式を奪われた。それは彼らにまったく非のないところでの受難であった。牧歌的な生活を理想化して描くことで，すでに失った自然や暮らしのかけがえのなさを象徴するとともに，我々が暮らす産業資本主義社会を批判しようという意図もあるに違いない。もうひとつは，ここで描かれる生活が被害者の水俣病闘争の根拠になっていることを示すことである。漁民の日常生活は，チッソに代表される近代資本制社会を組織している論理と対立するものであり，彼らの闘争はそうした生活の位相に根拠をおいていた（渡辺 2011: 83）。その延長線上で，相思社が取り組む社会運動も，水俣生活民の暮らしのあり方を学び，豊かさや利便性を求める我々の暮らしのあり方を見直すことを提起している[15)]。

展示全体の中核部分に当たる「企業の犯罪」と「原因究明期」という 2 つのコーナーでは，人命が軽視され，企業の利益や行政の責任逃れのために対応が遅れ，被害が拡大していった事実を，被害者の立場から糾弾している。このコーナーは文章によ



写真 5　考証館の患者運動の展示

る解説が特に多くなっている。チッソ本社から切り取ってきた鉄格子，患者手帳，補償協定書といった実物には存在感があり，個人の前に立ちはだかる強大な国家官僚システムを表象することにある程度成功している。天井から吊される水俣病運動の象徴である黒の「怨」旗と「死民」と書かれたゼッケンは，展示場全体に立ちこめる患者の怨念を象徴するかのようだ。とはいえ，それらのモノ自体が喚起する意味を深く理解するには，どうしても背景の説明が必要になる。「患者をだました見舞金契約」「チッソを擁護した『科学者』たち」「患者たちはやっと立ち上がった」「全国の注目を集めた水俣病判決」といったタイトルの解説パネルは，全面がほぼ文章で埋められ，チッソがどんな犯罪行為をおこなったか，行政がチッソを擁護し被害者を軽視したことによってどれだけ対応が遅れ，被害が拡大したか，被害者がどんな運動をおこない，いかに無視されたかを批判的に解説している。たとえば，「汚染魚は放置された」というパネルの最後には次のように書かれている。「水俣湾の魚が原因で病気になることが，しだいに明らかになってきたが，厚生省は法律で『魚を捕ってはいけない』と決めることをしなかった。この時以来，今日まで水俣湾内の魚は，法律で捕ることを禁止されたことは一度もない。それもいつの間にか『大丈夫だ』といわれて，1973 年に第三水俣病事件が起きるまで再び水俣湾内の魚は捕られ，人びとに食べられていた」。

写真はある程度，差別や抑圧，暴力といった表象困難な記憶や感情に光を当てることができるかもしれない。少なくとも，それらがどのようなものであったかを想像するための手がかりのようなものを与えてくれる。水俣病事件を象徴する写真といえ

ば，みる人の恐怖感を増幅させるような，激しくけいれんする末期の劇症型患者のものだろう。それらは水俣病の実態や恐ろしさを伝えるのに役立つが，逆に偏った被害者のイメージを植え付けるだけでなく，水俣病に対する人びとの誤解を助長し，行政や社会の対応を誤らせる危険がある。考証館はその種の写真を 1 点しか置いていない。一方で，運動する患者や支援者の写真を数多く展示する。チッソの株主総会で幹部を取り囲む純白の巡礼服を着た患者たち，拡声器のマイクを握って演説する支援者，水俣病被害者の遺影を胸に繁華街をデモ行進する患者家族といった白黒の記録写真である。水俣病被害者にとって運動は，裁判も含め，被害の苦しみを象徴的に訴える場であり，自分たちの怒りを公的に表現するカタルシスのドラマであり，現代社会の道徳的問題についてコメントする場でもあった（cf. Das 1995: 141）。展示された写真からは彼らのそうした激しい情動が伝わってくる。

「多様な被害」という次のコーナーも，模式図と文章ばかりのパネルで構成される。このコーナーの原型をつくった吉永さんは，ここでもっとも表現したかったのは精神的被害だったという。だが，展示を通じて精神的被害を表象することは難しいので，知恵を絞った結果，差別や偏見の表現を紹介するパネルを考えたという。「政治家たちの患者非難」というパネルでは，「認定申請者のなかには補償金目当てのニセ患者がたくさんいる。もはや金の亡者だ」といった政治家の発言を実名入りで紹介し，「政治的意図を持ってなされるこうした人びとの発言は，世論に影響を与え，被害者への偏見や差別をより強くしている」と断じている。「こんなことばが投げつけられた」のパネルでは，無知や偏見からくる被害者への誹謗中傷が，黒地に白字で並べられている。「認定されるためにフラフラ歩く練習ばしよる」「うつるけん，よるな」「患者がいるからこの町は暗くなったっぞ」。解説文は，「水俣病はチッソがつくり出した『犯罪』であるという事実を知らせることからしか，このような患者への暴言は消えない」と結んでいる。来館者の多くはこのパネルの前で立ち止まり，じっと解説を読んで，それからしばらく動けなくなっていた。

1995 年に政府が未認定患者の救済策を提示して以降，被害者と行政との関係は和解に向けて少しずつ変化した。考証館はこれにあわせて何度か展示を更新してきた。その変化がもっとも大きくみられるのが，展示の最後にあたる「対立から創造へ」というコーナーである。2004 年にわたしがはじめて訪れたとき，考証館はまだ開館当時に近い運動史中心の展示をおこなっていた。展示全体でチッソの犯罪行為と行政の怠慢を厳しく糾弾していた。2005 年のリニューアル時に，「展示の流れが左翼的な運動史観によって構成されていることによって，『水俣病を伝える』目的が，運動の要

求実現に収束している」（川部 2003）ことを自ら反省し，新たに「もやい直し」事業の紹介を展示に加えることにした。「船と岸壁，あるいは台風のときに船と船をつなぎとめる綱を水俣では『もやい（舫）綱』と呼」び，もやい直しとは「水俣病と正面から向き合い，対話し共同する地域再生の取り組み」のことである（解説パネル）。もやい直し関連の各種イベントの他，ゴミ減量運動，環境マイスター認定制度，環境教育など，行政の呼びかけで始まったもやい直し事業を紹介し，「差別や偏見の解消はまだまだ達せられたとはいえず，『もやい直し』は始まったばかりである。深刻な被害・対立を体験した地域がいかにそれを乗り越えるか。水俣の『もやい直し』は，民族紛争や宗教対立とも通じるテーマをも持って，これから形作られていくものである」と結んでいる[16]。

4.2　展示のアプローチ

考証館は展示内容だけでなく，アプローチにおいても市立資料館と対照的である。市立資料館は専門家のデータを用いて出来事の客観的な特徴を提示し，展示内容に科学的権威を付与していた。これに対し考証館は，相思社の活動経験や被害者との信頼関係を提示し，それによって展示内容に信憑性や喚起力を生じさせている。わたしはこれを民族誌的権威と呼びたい。

民族誌的権威という概念をわたしは民族誌的調査と民族誌との関係の類比から採用している。「民族誌（学）的権威（ethnographic authority）」（Clifford 1983; ロサルド 1996; Marcus and Fischer 1999; クリフォード 2003）とは，フィールドでの経験を民族誌として記述するときに，特定の時制や声，メタファー，修辞法などを用いることによって生み出される民族誌家の権威のことだ。同じことは博物館展示についても考えられる。展示構成や展示品の選択，展示ケース，ラベル，解説パネル，照明，写真の使用等によって，展示制作者の権威がつくり出されている（Karp and Kratz 2000）。本稿では，展示制作者が科学的根拠に基づき対象者を客観的に提示しているという印象を来館者に与えることによって生み出される権威を科学的権威と呼ぶ。これに対し，民族誌的記述にみられる権威戦略と類似のものとして，展示が制作者と対象者との長期に渡る人格的な関係を反映したものであるという印象を来館者に与えることによって生み出される権威を民族誌的権威と呼ぶ[17]。科学的権威と民族誌的権威はともに展示対象となった人びとの経験を叙述する権威が自らにあることを主張するものであり，博物館展示における権威の形成にかかわる 2 つの異なるアプローチととらえることは可能だが，制作者が意図的に工夫するレトリックや戦略というよりは，展示の効

果についてのものである。

考証館の展示も，図や表を用いて科学的データを提示している。しかし科学的権威を付与するという意味では成功していない。キノコ工場を改造した建物，薄暗く冷暖房設備のない展示室，統一性のない概念図や統計表，訂正の跡がみえる解説文，汚れのある解説パネルや変色した写真，展示に使われるふつうの事務机，手作りの模型などは，展示の科学的信頼性についての来館者の判断にマイナスの効果を与えているだろう。また，解説文にみられる糾弾調の，非難めいた過激な表現も，展示内容の信頼性や道徳性に疑いをもたれる恐れを作り出している。特定の個人や団体の責任追及に焦点を当てすぎているために独善的に映り，主張の信頼性を薄れさせているのだ。

しかし考証館の展示は，民族誌的権威によって，被害者の生きられた経験を証言したものとしてその真実性を来館者に訴えかける力をもつ。被害実態の目撃証言であると来館者に認知されることで，展示の信頼性を高めているのだ。考証館は被害者と支援者によってつくられた博物館であり，彼らの個人的な記憶を展示している。じっさい，展示物の多くと被害者とのあいだには人格的な関係がある。実物のほとんどは寄贈品であり，寄贈した被害者の名前とともに展示されている。デモや座り込みに参加する被害者の写真が展示可能になっているのは，本人あるいは遺族と相思社とのあいだに信頼関係があるからだ[18)]。情感豊かなチッソ工場や漁村の暮らしの絵，かつての水俣の写真は，被害者や支援者が描いたり写したりしたものであり，彼らが「自分にとっての水俣病」を見つめ続けた成果である。また，科学的権威を与えるうえではマイナスの効果があった糾弾調の解説パネルも，民族誌的権威を与えるうえではプラスの効果を持つ可能性がある。展示パネルの語りは被害者を代表したり，直接代弁したりするかたちになっていない。しかし解釈の語調や文体とそこにうかがわれる道徳意識から，被害者の気持ちを理解し彼らを支援しようとする者たちが語り手になっていることがわかる。来館者はそれらのことばを被害者の悲しみや憤りを表現するものとして受け入れることができるだろう。

考証館とその展示物が帯びる民族誌的権威は，記憶の場所にあるという事実によっても支えられている。考証館は水俣湾から 1 キロほど内陸に入った穏やかな丘を登り切ったところに立っている。行きにくい場所，みつけるのが困難な場所に位置しているのは，元々，水俣病被害者の拠り所として建設された相思社の敷地内に建てられていることによる。敷地前の道路は車一台がやっと通れる幅の農道で，大型バスで行くと 500 メートル手前の空き地で降りて歩かねばならない。そこから考証館までの民家や畑の景色は記憶の場所という感覚を呼びさますことだろう。あるいはまた，被害者

の日常生活に分け入っているというイメージを持つかもしれない。さらには，相思社そのものが，1970 年代後半から 1980 年代にかけて被害者運動の拠点となった歴史的な場所でもある。集会棟にある仏壇では水俣病被害者百柱以上の位牌を預かっており，庭には水俣病で死んだ「ネコの墓」が建っている。こうした場所の感覚や情動に彩られた景色は，自らはその出来事を経験していない来館者が記憶を想像することを助けるだろう（White 2004: 299; Williams 2007: 102）。人は記憶の場所でこそ，水俣病で亡くなった人を見出したり，彼らに話しかけたりすることができる（cf. スターケン 2004: 31）。考証館は説明や解釈のための表象のシステムであるというだけでなく，記憶の場所にあることによって，継続する生きた歴史のなかにいるという感覚を来館者に生じさせる力を持つ。歴史的現実に自らを浸らせるような空間，展示されるモノや写真を眺めるための神聖な空間になることができるのだ（ソンタグ 2003: 120）。

考証館の展示のあり方を考えるうえで重要な展示物が出口手前に 2 つある。ひとつは「わたしの伝えたい水俣」というパネルであり，考証館スタッフが一人ひとり顔写真入りで，簡単な自己紹介とともに，相思社に入った経緯，水俣への思い，伝えたいことなどを自分たちの言葉で語りかけている。たとえば，「水俣病を伝える」と題した遠藤さんの文章にはこういう一節がある。「はて，いつから自分はこんなに水俣のことが好きになったんだろう。少なくとも 20 年前には，チッソばかりでなく市民も市役所も敵だと思っていた。そういえば 1995 年に子どもが生まれてから『この水俣生まれの水俣育ちになる我が子が，自分のふるさとを好きになってもらいたい』と，親としてのエゴイスティックな感情を持つようになった」。永野三智は「水俣病の裏と表を発信したい」という文章でこう書いている。「実際に『今』苦しむ患者の方に出会い『水俣病は終わっていない』の意味がわかってきました。聞き取りのなかで相談者のさまざまな思いがあふれ出します。日々の症状や将来への不安，自身の歴史や水俣病への思い，診断によって下される『水俣病』を背負って生きること，認定されたから終わり，手帳を取得したから終わりではありません。人生は，ずっと続いていくのです」。これらの語りから，展示を作っているのがどんな人か，被害者や加害者とどんな関係にあるか，どんな人間の目を通して被害者の物語が語られているかということが理解される。そうした情報は来館者が展示内容を相対化して評価することを助けるだろう。そして考証館の展示の信憑性や喚起力，すわなち民族誌的権威を高めることにつながっているはずだ。

もうひとつは，「水俣病事件をめぐる表現活動」という題の展示ケースである。そこでは『苦界浄土』の自筆原稿をはじめ，「多様な『わが水俣病』を伝える」小説や

写真集，記録映画のフィルムやシナリオ，演劇の脚本などが展示されている。解説に明記されてはいないが，これらの著作者は長年にわたり相思社と関係が深い人びとであり，水俣病被害者を支援してきた人びとであり，自らが共感した被害者の思いを伝えようとして表現活動に携わってきた人びとである。この展示は，考証館がそうした「わが水俣病」の表現活動のひとつであり，相思社の運動の歴史と文化のなかから生まれたものであることを象徴している。それはまた，石牟礼道子の著作にみられたような，患者たちの情念そのものに立ち会っていると感じられるような展示を考証館が目指していることを宣言する。

この展示は，来館以前に読んだ本や観た映画で知ったことと，実際に水俣で経験したこととがここで出会うという間テクスト性を象徴してもいるだろう。来館者の多くはこれらの出版物や映像から，水俣病事件についての知識を得て，関心を持って，水俣を訪れている。「大衆文化生産と記憶の実践とは相互に対話しており，記憶の場所は大衆文化で流布している物語を通じて意味を獲得する一方で，場所そのものが集合的経験として記づけられた物語を普及させる」（White 2004: 294）。こうした確認を通じて来館者は水俣病事件との情動的結びつきを深めると考えられる。

4.3　展示が伝えるもの

考証館の展示は何を伝えているだろうか。おそらくそこには 3 つの主張が含まれている。ひとつは，裁判闘争を基軸とする水俣病運動の成果として和解が達成されたという主張である。展示構成からは，人びとが豊かに暮らしていた不知火海で，チッソ・行政による犯罪的行為があり，被害者は立ち上がって闘い，少しずつ勝利を得てきた，というストーリーが読み取れる。そして最後に，行政との和解以降の，2000 年代後半の「もやい直し」活動の紹介がある。記憶とは，過去の瞬間を正確に想起したものというよりは，和解やアイデンティティの回復といった社会の必要性のために断片的な過去を再構築してできるものだろう（Brown 2006: 251）。相思社が自らの活動や行政との関係の変化に応じて展示内容を改訂したのは当然だし，評価すべきことだと思う。しかしこの改訂によって，水俣は悲惨な経験を乗り越え，環境都市として誇れるようになったという，市立資料館が描く物語に近いものがそこから読み取れるようになった。1970 年代以前を中心に扱う「多様な被害」までの展示パネルでは写真がすべて白黒であったのに対し，「もやい直し」の展示ではカラー写真が使われている。そのことも，まるで暗黒の過去から明るい現在に移行したことが暗示されているかのような印象を与えている。そして相思社がつねに主張する「水俣病は終わって

いない」というメッセージを弱める結果になっている。じつは「もやい直し」のある最終通路の反対側には「現在の水俣病補償」というコーナーがあり，そこで残された課題が紹介されているのだが，白黒を基調とする細かい図表が並んでいることによって来館者の注意をあまり引いていない。とりわけ展示場を短時間で駆け抜けるとそうなのだが，被害者が行政や市民と和解し，協力して環境モデル都市を目指すまでになったという印象を来館者は持つだろう。

運動から和解へというこの物語には，被害者の多様性を隠してしまうという問題点もある。水俣病の被害者といっても一枚岩ではなく，事件発生当初から諸派に分かれ，分裂や合体を繰り返すとともに激しく対立してきた。しかし，被害者があたかも同質集団であり，被害者全員が一致団結して闘ってきたかのように考証館の展示は表象している。確かに初期の被害者には漁民が多かったのだが，被害を受けたのは漁民だけではない。魚介類を日常的に捕獲して食べていた海辺のその他の住民や，彼らからもらって食べていた隣人へと被害は拡大し，最初は被害者を差別していた人たちが後には被害者になっていった。こうして被害者と加害者との境界線が不明瞭になり，被害者の親族や共同体に多大な緊張を生み出していく過程は，水俣病被害の歴史において特に重要なものだと思われるが，展示はこの過程に触れていない。もっとも激しい差別を受け，激烈な闘争に参加した初期の被害者だけを被害者として実体化する危険を冒している。しかも特定の団体の歴史を中心に展示を構成しているにもかかわらず，そのことを明記していない。相思社が支援する被害者団体の運動が水俣病事件の歴史的展開を切り開いてきたことは確かだが，被害者が直面した対立やジレンマ，不安などをすべて無視し，さまざまな多くの物語をひとつの闘争の語りに包含してしまうのは問題だろう。

第二に，考証館の展示は，水俣病事件は「社会的な苦しみ（social suffering）」を生み出したと主張している。「社会的な苦しみは，政治的・経済的・制度的な力が人びとに加えられることによって，また，それらの力が人びとの社会的問題の取り組み方に影響を及ぼすことによって，生み出される」（クラインマン他 2011: i）。水俣病とは，一義的には，チッソという企業が水銀を含む工場廃水を海に流し，その水銀によって汚染された魚介類を多量に摂取した人びとに生じた健康被害であるが，それと同時に，あるいはそれ以上に，社会にみられる漁民差別の歴史的構造，チッソの植民地主義的支配，生業を奪われたことによる貧困，行政のとった対策，司法システムの不備といった社会的プロセスが重なり合って被害が拡大していった。とりわけ考証館の展示が強調するのは，「ニセ患者発言」に端的に示されるように，被害者は自らの

苦しみを，本来彼らを救うシステムであるはずの臨床医学や行政制度の実践を通じて増幅させられてきたということだ。

第三の主張は，水俣病事件は現代社会に生きる私たちの問題として考えなければならないというものだ。考証館の展示は，我々から離れた過去の出来事としてではなく，現在の生活と直接結びついた問題として水俣病を提示する。自然や人間より利益を優先する社会が水俣病を生み出した。その社会の延長線上に現在の日本社会はあるのであり，その歴史に加担してきた以上，我々にも責任がある。このことを来館者一人ひとりに自分の問題として考えることを求めているのだ。「同情するのではなく，我々の特権が彼らの苦しみに連関しているのかもしれないという洞察こそが課題であり，心をかき乱す苦痛の展示はそのための導火線に過ぎない」（ソンタグ 2003: 102）。

5　考証館の語り

考証館には，団体客を対象に，相思社のスタッフが 15 分から 30 分をかけて展示場を案内するサービスがある。以下に述べるように，それは内容からすれば，「案内」や「解説」というよりも「語り」に近いものだ[19]。わたしはこの語りこそが，相思社の水俣病を伝える活動，彼らのいう「考証館活動」において決定的に重要な役割を果たしており[20]，考証館は展示をみる施設としてよりも，物語が語られる舞台としての存在意義の方が大きいと考えている。

展示案内は相思社スタッフが交替でおこなうが，それぞれの案内はきわめて個性的な内容を持つ。即興的なものであり，相手や話の成り行きによって対象も内容も変わる。マニュアルのようなものはなく，特別な訓練もおこなわれていない。語りの内容と展示物とのあいだに直接的な関係がないことも多く，展示物について解説するというよりも，スタッフ個人が相思社で活動するなかで気づいたこと，経験したこと，考えたことなどを語るために展示物や考証館という空間が用いられるといった方がよいかもしれない。わたしのインタビューに対し，相思社の N さんは案内で次のようなことに注意していると語った。「それぞれが感じる水俣の魅力なり水俣病の魅力というのを語れているということですね。そこにどうやって自分を出せるかというのがありますよね。客観的に水俣病の説明をするんであれば，相思社じゃなくていいと思うんで，相思社の案内の意味がなくなってくると思いますから，間違っていてもいいと思うので，自分が思う水俣病とか，自分が感じる（水俣病とか）……」。案内でガイドが個性を出すことはむしろ意図的におこなわれていた。

とはいえ案内の内容には共通性がみられる。N さんは次のように述べる。「最初，相思社の話ですよね。漁民の生活。チッソ。で，ネコ実験，胎児性（水俣病の解説），くらいですか。……運動のあたりはだいたい飛ばします。基本的に飛ばします。もやい直しはさらっとですね」。わたしは 2005 年の調査で，相思社スタッフ全員の案内を何度も観察したが，だいたいみなこれと同じパターンだった。もっとも時間をかけて熱心に説明するのが，入ってすぐの「豊かな海の暮らし」のコーナーで，ほとんど飛ばしてしまうのが水俣病運動史だった。来館者の滞在時間に余裕があれば，後半の「多様な被害」の一部と「対立から創造へ」の一部がそれに加えられた。

「豊かな海の暮らし」について熱心に語るのは，現在の相思社が水俣病とともに生きる人びとの姿をもっとも伝えたいと思っているからだ。相思社の K さんは案内で次のことに注意しているとわたしに語った。「それは俺自身の反省と関係するけど，生活とか文化というのは従来否定してきた人間なもんですから，そこから新しい世界が生まれると思っていなかったから。ここ 10 年くらいはそこしかないなと思っているふしもあって，だから特にあの中でも，暮らしに含まれる部分，最初の水俣の入り口を描いた絵，砂田明の絵と，その次の坪段で魚をみんなで分けている絵とか，暮らしでいうと，あとなんだろうな，日常生活のなかでの困難みたいなほうに重点をおいて一応説明してると思っていて，それはなるべく運動とか，補償要求とか，という話にならないように，水俣病のことを理解して欲しいなぁというふうに思っている。その，個々人の暮らしにとってなんだったのかという，……『暮らしのなかの水俣病』という切り口が，一番おもしろいなぁといま思っているから……なるべくそういう日常生活というところを切り口にして，説明したいと思っています」。水俣病被害者については広く世間に知られた 2 つのイメージがある。ひとつは，不治の病に冒され，ひっそりと隠れて暮らす，哀れで孤独な犠牲者というイメージだ。もうひとつは，天使のように清らかな存在，進んで赦しを与える聖者というイメージである。どちらも水俣病被害者のある一面を誇張してとらえており，彼らの生活の危機的現実や，そのなかで逞しく生きる姿をまったくとらえていない。そうした水俣病とともに生きる人びとの姿，「暮らしのなかの水俣病」こそが，相思社がいま，語りで伝えようとするものである。

案内で語られる物語の多くは，被害者について相思社スタッフが見聞きしたことそのままではない。彼ら自身の経験に変換して，彼らのことばで語るものである。先に紹介した「水俣病を伝える」というパネルに次のような記述がある。「私たちは，『水俣病を伝える』ことにどのような価値や意味があるのかを，わかりきったことにして

はいけない。伝える人が『水俣病とは何か』を自分に問うことがなければ，水俣病は緊張感のない一片の情報となってしまう」。語られるのは相思社スタッフによる自伝的な物語であり，被害者の生に触れた経験，その経験について反省したこと，結果として生じた自己変容の過程についての語りである。これを相思社では「わが水俣病」と呼んでいる。彼らは被害者の経験を自らのもののように装って語るのではなく，埋められない距離のある他者の経験として認めたうえで，彼らがそこから何かを学ぼうとするものとして語るのだ。

N さんは展示の説明で気をつけていることを次のようにいう。「できるだけ個人的なつながりのなかで案内をしていきたい。だから相思社の枠のなかでの案内ではなくて，相思社の N としてできることをやっていきたいなとは思いますね」。水俣病事件についての深い思いを語ろうとすれば，それは個人的なものにならざるをえない。「他者の苦痛へのまなざしが主題であるかぎり，『われわれ』ということばは自明のものとして使われてはならない」（ソンタグ 2003: 5–6）のである。それは又聞きではなく，おのれ自身の眼の証言に基づいて自分の意見を確立したものであるからこそ，生き生きと物語ることができるのだろう（ギンズブルグ 2003: 58–59）。彼ら自身に直接の影響を及ぼしたものであり，血肉となっているものであり，自分の中に引き継がれた生の記憶である。

相思社はこうした語りによって自己変革のための素材を来館者に提供していると考えている。N さんはわたしにこう語った。「基本的には案内って素材提供だと思うんですよね。素材を提供して，あとはどう判断するかというのは，向こうの判断だから，もちろん結論まではもっていかないし，個人的には結論はしゃべっても，判断というのはその人たちがするものですから，というふうには思ってますね」。語りを相思社による「教育」と考えるのは適切でないだろう。彼らは来館者が自らの素朴な世界観や倫理意識を疑い，人と人との関係や人と自然との関係をいっそう深いレベルで真剣に考えるための媒体として物語を提供する。ただし自分の生活に直接かかわる重要な問題としてそれを受けとめ，反応するかどうかは，来館者しだいである。来館者はそれぞれ聞いた話を，能動的に，自分にとってより身近な，切実な問いに置き換える作業を課される。この過程は「学習」と呼ぶのが適切かもしれない（Williams 2007: 154）。ただしこの学習では最終的な答えを出すことを必ずしも求められるわけではない。問題がなぜ起こったのか，どのようにして起こったのか，そこにある教訓とは何かを考えることがより重要である。こうした学習のアプローチは，学習者の社会的背景や文化的態度の多様性を前提としつつ，一人ひとりの能動的，政治的な知識の構築

過程を重視する近年の構築主義的な博物館学習理論と合致するものである（Hooper-Greenhill 2000; Sandell 2007）。しかしもちろん相思社の語りの実践はそうした理論的伝統から生まれたものではなく，彼らが支援者として活動するなかから独自に生みだしたものだ。

考証館は相思社スタッフと来館者，さらには来館者どうしが水俣病事件をテーマに討論する場として存在する。水俣病事件の発生と被害の拡大は，いかなる社会のあり方と関係していたのか。二度と悲劇を繰り返さないためにはどんな社会を目指すべきなのか。そのためには自分たちの生活をどう変えなければならないのか。これらの問いが相思社スタッフの関心の中心にあり，彼らはこれらの問いを考証館で来館者とともに考えようとしている。相思社が考証館を運営するのは，水俣病事件の歴史を伝えるためというよりも，被害者を支援する活動のなかで彼らがみつけた課題を，現在と未来の警鐘のために利用できるようにするためだ。それは協働的な文化創造の過程といえるだろう。

6　おわりに

近年，博物館実務者のあいだで，抑圧的，差別的な傾向のある支配的言説に対抗したり，それらを無効化したりする取り組みの足場として博物館を利用することの潜在的な可能性について関心が高まっている（Sandell 2007）。本稿で検討した水俣病歴史考証館は，水俣病事件について被害者の立場からのオルタナティブな見方を提示し，公的歴史叙述に対抗している。行政の失策や怠慢によって水俣病の被害がいかに拡大したか，政治家や地域住民による差別や偏見によって水俣病患者がどのような精神的被害を受けたかを具体的に指摘し，その責任を追及している。また，公的歴史叙述が無視する，水俣病被害者の生活や文化を紹介し，彼らにとって水俣病被害がどんな意味を持つかを来館者が想像できるようにしている。

しかし考証館は，たんに表象の次元で対抗的博物館と呼べるだけではない。展示空間におけるスタッフと来館者との相互行為として博物館実践をとらえると（Sandell 2002; 2007），その内容が一般的な展示施設の枠組みを越えるという意味でも，対抗的な博物館と呼ぶことができる。考証館の実践はモノによる表象よりも語りを通じた対話を中心とする。彼らが語るのは，展示解説でよくあるようなできあいの教科書的知識でなく，彼らが水俣で地域の人びととともに暮らし，いろいろな立場の人の話を聴き，自ら考えて身につけた，情動的で道徳的な，生きられた経験としての水俣病事件

と，その個人的な学習のプロセスである。彼らはそうした学習の成果を教訓として来館者に押しつけるのではなく，来館者が自己とのつながりを発見し，反省的考察をするための素材として提供する。相思社スタッフからすると，来館者に自分で考えてもらうことが決定的に重要なのである。だからこそ彼らはできるだけ対話のなかで個々の来館者の興味に適した話題を選んで語る。来館者は相思社スタッフとともに語りに参加し，共同で意味を構築するのだ。ソンタグは，人びとの苦しみをみる権利があるのは，その苦しみを軽減するために何かができる人びとだけであり，それ以外は覗き見をする者だと断じている（ソンタグ 2003: 40）。しかし被害者の苦しみを知り，何かを学んで自身の生活を反省し，社会を変えようと考えることができるならば，その人はもう覗き見をする者とはいえないのではないか。

こうした語りと対話が考証館という民族誌的権威を帯びた神聖な空間でおこなわれることは重要だろう。被害者や遺族と特別な関係にあり，彼らから信頼を付与されていることから，考証館にある種の神聖さが生み出されている。実際に事件と関係の深い場所で真剣に支援活動を続ける人から情熱的な語りを聴き，情動的な経験をし，触発されるといった過程を経るからこそ，来館者はいっそう反省的考察を促される。語りは言語的な過程であるのと同じくらい身体的な過程でもある。ここにメモリアル博物館の社会運動の媒体としての可能性がある。メモリアル博物館は，悲惨な歴史的事件を記念するメモリアル（記念碑）と，事件の文脈を説明する博物館とが組み合わさったものだ（Williams 2007: 8）。一般に，メモリアルと博物館，記念追悼と教育とのあいだには緊張関係がみられるが，メモリアル博物館ではその両者が結びつくことによって悲惨な歴史的事件の語りに道徳的，情動的効果が加えられる（White 2004; 306: Willimas 2007: 8）。

考証館は，相思社という運動団体が，歴史的文脈と必要に応じて，博物館という制度を独自のやり方で専有化した施設である。展示物や解説パネル，展示案内，場所や建物までを含め，考証館のあらゆる側面は相思社の文化的伝統や価値観を透過したものであり，それらと連続した存在である。展示施設というよりは，社会運動の媒体といった方がよいだろう。開館当初の考証館には，抑圧や差別に責任がある人びとを追及する，あるいは被害についての意識を高めることで行政に圧力をかけるという意図が強くみられた。しかしその後，より多くの人びとに水俣病事件を伝え，社会のあり方について再考を促すことに相思社が力を注ぐようになると，考証館はその実践の核となるメディアになった。それは全国から水俣を訪れる人びとの窓口となり，目指すべき社会について話し合うフォーラムとして機能する。考証館を訪れる人は，オルタ

ナティブな社会の可能性を開く運動に参加することを促されている。

謝　　辞

相思社の遠藤邦夫常務理事は，草稿に目を通し，貴重なご意見をくださった。また，3 名の査読者の方々からも有益なコメントをいただいた。ここに記して感謝したい。

注

1）市立資料館は入館無料，考証館は入館料 525 円で，過去数年の年間入館者数は前者が約 4 万人，後者が約 3 千人である。水俣ではこの他に，国立水俣病総合研究センターの附属施設である「水俣病情報センター」が小さな展示スペースを有している。
2）厳密にいうと，考証館は相思社の展示施設であり，相思社のスタッフによって管理運営されている。相思社の運営費は維持会費，寄付金，事業収益，考証館入館料等によってまかなわれている。相思社のスタッフ数は考証館設立時の 1988 年に 22 人だったが，1989 年に 11 人へと半減し，その後漸減して，2011 年末には 5 人になっている。
3）水俣病に興味をもつきっかけは，タイ北部で日系企業の調査をしていたときに，工場排水による河川や地下水の汚染に反対する村人から，「日本企業は水俣病をタイに輸出している」という訴えを聞いたことだった。
4）本稿で氏名が記載されている場合は実名であり，その多くは展示や刊行物からの引用である。匿名がふさわしいと判断した場合にはイニシャルを用いた。
5）本稿は，その成果の一部として博物館実践に焦点を当てたものである。水俣病を伝える運動については，平井（2012）も参照のこと。
6）本稿は，フィールドワーク中に観察した展示場内での来館者の振る舞いや相思社スタッフとの会話，感想ノートへの書き込みなどから，来館者の展示への反応について言及しているが，来館者から直接聞き取りするような調査はしていない。
7）本稿では，患者と被害者をほぼ同じ意味で用いている。当事者が患者と表現している文脈では，それを優先した。
8）新しい社会運動とは，フェミニスト運動やエコロジー運動，平和運動などのように，1960 年代以降に出現した，それ以前とは性質が異なる社会運動のことを指す（メルッチ 1997）。
9）彼は調査団の団員ではないが，ときおり現地調査に参加していた。
10）生活学校は，水俣に興味を持つ全国の若者がはじめて水俣を訪れる機会を提供した。一部は相思社のスタッフとしてその後も水俣にとどまることになった。10 年間で 60 名の卒業生を輩出し，そのうちの 4 分の 1 程度が現在も水俣近郊に居住している。卒業生で相思社スタッフになった者は延べ 10 名を数える。
11）水俣病事件の被害者は市立資料館の展示制作にどの程度関与しただろうか。結論からいえば，被害者の意思は展示にほとんど反映されなかったといってよい。設立前に構成された水俣病資料館等検討協議会 17 名の委員には，患者団体の代表が 3 名含まれていた。しかし関係者から聞いた話を総合すると，制作にはいっさい関与していなかったようである。相思社で聞いたかぎりでは，被害者から展示について意見を聴取したという事実もなかった。市立資料館には，登録している十数人の水俣病被害者が団体客に対して自らの被害体験を語る「語り部」制度があるが，このメンバーが出した要望が展示に採り入れられたこともなかったようである。
12）「スタイルの違うパネル」とは次のような意味である。常設展では基本的に開館時に大手展示業者によってつくられた展示パネルのデザインをそのまま維持している。これに対して企画展でつくられ新たに壁面に付加された展示パネルは，デザインの統一性を無視した，1 枚ないし数枚の写真と大量の文字情報からなる，雑誌記事をそのままパネルにしたようなものになっている。なお，本稿での記述は，2012 年 1 月の調査に基づき，常設展に焦点を当てたものである。

13）ただし，2000 年代後半以降におこなわれた企画展では被害者の経験に焦点を当てたものもある。
14）ダスは，ボパール事件において，被害者を抑圧する司法および医療の言説が，それらの言説の生産者，すなわち学界や法曹界に正当性を与える結果になっていると論じた（Das 1995）。
15）漁民の自由で自律的な生き方が活動家の自己像のひとつとして理想化される側面もあると考えられる。
16）「もやい直し」とは 1994 年に吉井正澄市長が提唱したものである。この言説は，ある意味では，再生水俣のイメージづくりのために，抑圧されてきた被害者に，市民としての義務を優先させることを求めるものであり，加害者が自らは反省を深めずに対抗的な言説を封じ込め，抑圧する言説になり得る。あるいはまた，問題を個人の気持ちの問題にすり替えることによって，社会の構造的要因から注意を背けるという効果もある。それでも相思社がもやい直しを支持するのはなぜか。それは相思社の T さんがいうように，「一言でいうなら，相思社設立の第一目的である『地域で患者がふつうに暮らせること』のために『もやい直し』が必要不可欠である」と考えるからだ。
17）わたしは支援者（相思社）と被害者とのあいだに力関係や文化の違いが存在しないと仮定しているわけではないが，この微妙な問題については本稿で扱う内容の範囲を越えており，稿を改めて論じることにする。
18）S・ソンタグが「ピエタのマリアの顔立ち」（ソンタグ 2003: 78）が現れていると激賞した，母と被害者の娘を写した E・スミスの写真は，母本人の意志をくんで，2007 年に考証館の展示から取り外された。
19）相思社による語りの活動については別稿で論じたことがあり（平井 2012），ここでは展示の解説だけに焦点を当てる。
20）「考証館活動」には，機関誌発行，ホームページやメールによる情報発信，被害者からの聞き取り，水俣病学習教材の作成などがある。

参照文献

石田　雄
1983 「水俣における抑圧と差別の構造」色川大吉編『水俣の啓示（上）──不知火海総合調査報告』pp. 41–90，東京：筑摩書房。
色川大吉
1983 「不知火海民衆史──水俣病事件史序説」色川大吉編『水俣の啓示（下）──不知火海総合調査報告』pp. 3–164，東京：筑摩書房。
金子　淳
2011 「公害展示という沈黙──四日市公害の記憶とその表象をめぐって」『静岡大学生涯学習教育研究』13: 13–27。
川部　岬
2003 「考証館担当者の苦闘」『ごんずい』79: 4–7。
ギンズブルグ，C.
2003 『歴史を逆なでに読む』上村忠男訳，東京：みすず書房。
クラインマン，A. 他
2011 『他者の苦しみへの責任──ソーシャル・サファリングを知る』坂川雅子訳，東京：みすず書房。
クリフォード，J.
2003 『文化の窮状──二十世紀の民族誌，文学，芸術』太田好信他訳，東京：人文書院。
栗原　彬
2005 『「存在の現れ」の政治──水俣病という思想』東京：以文社。
さとうおさむ
1993 「『水俣の工業化と都市化』は何を伝えるのか？」『ごんずい』15: 11–13。
スターケン，M.
2004 『アメリカという記憶──ベトナム戦争，エイズ，記念碑的表象』岩崎稔他訳，東京：未来社。

ソンタグ，S.
2003 『他者の苦痛へのまなざし』北條文緒訳，東京：みすず書房。
平井京之介
2012 「語りのコミュニティ──水俣「相思社」におけるハビトゥスの変容」平井京之介編『実践としてのコミュニティ──移動・国家・運動』pp. 337–363，京都：京都大学学術出版会。
弘津敏男
1993 「水俣病のようだが水俣病ではない」『ごんずい』15: 14–17。
堀　哲郎
1993 「現実の缶詰化」『ごんずい』16: 10–11。
水俣病センター相思社
2004 『もう一つのこの世を目指して──水俣病センター相思社 30 年の記録』水俣：水俣病センター相思社。
メルッチ，A.
1997 『現在に生きる遊牧民──新しい公共空間の創出に向けて』山之内靖・貴堂嘉之・宮崎かすみ訳，東京：岩波書店。
柳田耕一
1981 「水俣病歴史考証館──その構想を問う」『水俣』84: 1。
吉永利夫
1983 「記録することと生きること」『考証館通信』準備号 : 3。
1989 「水俣病歴史考証館の開館に寄せて」『建築文化』2 月号 : 90–91。
1991a 「市の資料館と私たちの考証館」『相思社だより』7: 2–3。
1991b 「伝えたい忘れられた記憶」『水俣』222: 1。
ロサルド，R.
1996 「テントの入り口から──フィールドワーカーと異端審問官」西川麦子訳，J・クリフォード & J・マーカス編『文化を書く』pp. 141–181，東京：紀伊国屋書店。
渡辺京二
2011 『民衆という幻像 渡辺京二コレクション 2 民衆論』ちくま学芸文庫。

Brown, T. P.
2006 Trauma, Museums and the Future of Pedagogy. *Third Text* 18(4): 247–259.
Clifford, J.
1983 On ethnographic authority. *Representations* 2: 118–146.
Das, V.
1995 *Critical Events: An Anthropological Perspective on Contemporary India*. Delhi: Oxford University Press.
Hooper-Greenhill, E.
2000 *Museums and the Interpretation of Visual Culture*. London: Routledge.
Karp, I. and C. A. Kratz
2000 Reflections on the fate of Tippoo's Tiger: defining cultures through public display. In E. Hallam and B. V. Street (eds.) *Cultural Encounters: Representing 'otherness'*, pp. 194–228. London: Routledge.
Marcus, G. and M. Fischer
1999 *Anthropology as Cultural Critique : An Experimental Moment in the Human Sciences*. Chicago : University of Chicago Press.
Sandell, R.
2002 Museums and the combating of social inequality: roles, responsibilities, resistance. In R. Sandell (ed.) *Museums, Society, Inequality*, pp. 3–23. London: Routledge.
2007 *Museums, Prejudice and the Reframing of Difference*. London: Routledge.
White, G. M.
2004 National subjects: September 11 and Pearl Harbor. *American Ethnologist* 31(3): 293–310.
Willimas, P.
2007 *Memorial Museums: The Global Rush to Commemorate Atrocities*. Oxford: Berg.